
少女時代

玉木 もとか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女時代

【Nコード】

N1810Z

【作者名】

玉木 もとか

【あらすじ】

西垣優花のお話である。

小学生、中学生と成長していく過程での、西垣優花の心が描かれている作品です。

プロローグ もしも出会ってなかったら (前書き)

このお話は実話です。

あまり、文章を書くのが上手ではありませんので、そのの所ご理解
いただけるようお願いいたします。

アドバイス、感想、コメント等ありましたら、是非お願いします！
では、お楽しみください。

ブローグ もしも出会ってなかったら

ブローグ もしも出会ってなかったら

もしも私は彼女と出会っていなかったらどうなっていたのだろうか
かとたまに考える。

もしかしたら、今よりずっと良い人生だったかもしれない。
もしかしたら、今よりずっと悪い人生だったかもしれない。

分からない。

それが私の結論だ。

もし、私が彼女に出会っていなかったとしても私は恐らく同じ壁
にぶつかっていたと思う。

でも、それを思い知るのもっと遅い時期だったかもしれないし、
そんなにも大きな壁だったなんて気付きもしなかっただろう。

ただ、壁が見えるだけ。

それで終わっていたと思う。

私は彼女と出会って、変わった。

変わった事が良かったのか、悪かったのか。

それさえも分からない

第一章 出会い（前書き）

すみません。

前の更新のときに言い忘れていたのですが、このお話は小さいまとまりごとに更新していきます。

よろしく願います！

第一章 出会い

第一章 出会い

「皆さん。新しい仲間が増えます。名前は西垣優花さん」

「よろしくお願ひします」

私は小さく頭を下げる。

私の家庭では転勤が多い。父の会社による都合のためだ。いわゆる転勤族である。

幼稚園のときは小学校に入る前に一度転勤をし、新しい地での小学校生活は僅か一年しかなかった。

その免疫があつてか、別れが悲しい事も無かつた。それは長くいられなかつた事もあつただらうが。

これも免疫があつてか、新しい地に来て新しい学校生活に不安は抱かなかつた。

そして、小学校二年生となつた今、また新たに転校をしたのだ。

そこは、全校生徒が900人前後と大きな学校だつた。

創立100年となり、古い校舎なのだが、補強工事がしてあり、災害に対しては安全である。

私は担任の先生に連れられ、二年一組の教室に入る。

そのときの第一声が、「うわっ。こいつ小せえ〜」だつた。

それを言つたのはクラスで一番大きい男の子である。

「小さい」と言われた事なんて何回もあるので、むっともしない。その男の子とは十センチ以上は絶対に背の差があつたと思う。私は小学校二年生の頃は百十五センチ程しかなかったのだから。

その日のうちになんとなくクラスのこの質問に答え、和気藹々とクラスに馴染めた。

そして、担任の先生に、

「今日はどうだった？クラスの皆とは仲良くなれそうかしら？」
と言う。

担任の先生は小太りで、優しいふいんきを持つ先生だった。その担任の先生が私が帰る直前に呼び止め、声をかけたのだ。

私はなんと答えていいのかも分からず、

「はい。仲良くしていく事ができそうです」
と曖昧に答える。

担任の先生は「そう」と短く答え、微笑む。

こうして私の転校初日の学校生活は終了した。

そして二日目。

転校初日には欠席していた少女が学校に来ていた。

そして、毎日行われる健康観察のときが来た。

その健康観察は出席番号と名前、今日の体調を言うのだ。私の場合、「出席番号三十四番西垣優香」となる。

それは普通の人にとっては造作もないことだが、初日に欠席していた少女には大変な事だった。

「はい。出席番号は？」

担任の先生は毎日の事なのだろうか、少女に優しく近づく。

「出席番号……五番」

それは今にも消え入りそうな声である。

私は辛うじて少女と席が近かったため、聞こえたが教室の隅々まで聞こえるような声では決して無い。

「それじゃあ、名前は？」

「大野……紗枝」

それは本当にか細い声でこちらまで不安になってくる。

私は大野紗枝をひそかに応援した。

実際に声を出して応援している人もいるが、私には大抵そんな事は出来ないだろうと思う。

クラスの何人かはこのやり取りをうつつとおしいと思っていたのだろうか、とずいぶん経ってからこのやり取りを思い出すとそう思った。私はそのときはとても素直で、人に裏表なんて無いと思っていた。

「元気ですか？」

「げ……元気です」

その声はあまり元気じゃないような声にも聞こえるが、これが地なのだろうと直感的に思う。

「はいっ。よくできました」

先生は軽く少女の肩をたたく。

そして、大野紗枝の健康観察が住んだ後はだいぶスムーズに進み、私も最後に健康観察を終える。

その後、先生は大野紗枝が今日健康観察ができた事を褒め、朝の会を終えた。

大野紗枝という少女は、大人しく控えめのようなのである。

あまりクラスの子と話はしていなかった。話しかけられたら、今にも消え入りどうな声で短く会話のやり取りをしているようである。

私は少し緊張しながらも大野紗枝に声をかけにいった。

「私、昨日転校してきた、西垣優香。宜しくね」

大野紗枝は少しの間、目を瞬く。そして、はっとしたようにあわてて答える。

「よ……よろしくね」

「ねえ。貴方の事、なんて呼べばいい？」

「……何でもいいよ」

少し戸惑ったように間を空け、答える。

「それじゃあ、紗枝ちゃんでもいい？私のことはなんて呼んでくれてもいいから」

私は仲の良い子でも決して呼び捨てにはしない性分だった。そのため、この少女に対しても“ちゃん”付けである。

「それじゃあ……優香ちゃんでもいい？」

「うん。いいよ」

私はなんとなく彼女とうち溶け合えたような気がした。

第二章 生まれて初めての友達との喧嘩

第二章 生まれて初めての友達との喧嘩

そして、私は紗枝ちゃんとかかなり仲良くなっていった。

私は紗枝ちゃんときを過ごすのは好きで仕方が無かった。紗枝ちゃんは、私が思っていたよりは明るい子で、普通に話せるようにはなっていた。

今思うと、紗枝ちゃんから見ればうつとおしい女だと思っていたんじゃないかと思う。自分の話ばかりで、相手の話を聞く事もしていたが、そのくだらない話に一方的に話を着き合わせていたんじゃないか、と。

当時の私はそんな事を考えもせず、紗枝ちゃんと接していた。

私は習い事などもしていたため、あまり紗枝ちゃんと遊ぶ機械は多い方ではなかったが、私にしては紗枝ちゃんと過ごす時間は他の者と比べればかなり多かった。

そして、ある日、紗枝ちゃんの家遊びに行った。

それは紗枝ちゃんと過ごすようになってからしばらくした時の事で、紗枝ちゃんと遊ぶ事が日課にもなっていた。

その日は復旧しつつある携帯ゲーム機を持って遊びに出かけた。

「うわあ。色々なソフトを持ってるんだね」

「……うん。ちよつと言ったら買ってもらえるんだ」

三十個ほどのゲームソフトがケースに入っており、どれも新鮮味あふれる物ばかりだった。

「……………いいなあ。家では誕生日とかしか買ってもらえなくて、誕生日の日ですら買ってもらえないこともあるんだよ」

「えっ！ そうなの？ 可哀想。ねえ、このゲームはやった事あるの？ これ、通信プレイが出来るんだ。やってみない？」

一つのゲームソフトを指差しており、そのゲームはコマーシャル

なので最近発売された物だ。

「うん。やるやる」

私はそのゲームは気になっていて、それがやれるのならばと思いで喜んでその話に乗った。

本人のゲームソフトと言うだけあって、紗枝ちゃんはゲームをするのはうまかった。

だが、私はゲームをするのは頭を使う物意外はあまり得意ではなく、私は明らかに紗枝ちゃんよりも技術で劣っていた。

そこで、少しだけ悪口を言ってしまった。

「いつものアイテムばかり使うんだね」

それは悪口というより嫌味に近かったかもしれない。

それにむっとしたのか、

「優香ちゃんだって、使おうとしてるじゃん」

しばらく無言になって、私は紗枝ちゃんにまた何か言う。

そして、紗枝ちゃんも私に何か言う。

私はさほど苛立ってはいなかった。だが、悪口を言っているうちにそれが当たり前になっていって悪口を言ってしまった。

そして、紗枝ちゃんもそれに応じて返答する。

そのの繰り返しだった。

それを繰り返して、その間ですら苛立ちを持たなかった私は、帰りのチャイムがなっている事に気づく。

「あつ！そろそろ時間だ。帰らなくちゃ」

私は断りをいれずに通信していたゲーム機の電源を切る。

紗枝ちゃんは自分のゲーム機の電源を切り、ソファに放り投げる。

二階にいた私達は一階へ降りていく。

私は何の前触れも無く、気ままに降りていく。だが、紗枝ちゃんの足取りは妙に遅かった事は覚えている。

「じゃあね」

私は玄関に行き、そう言って軽く紗枝ちゃんに手を振る。

いつもは「じゃあね」というような軽い挨拶をくれるのだが、その返事は無くて、紗枝ちゃんはまだ手を振っているかどうかも分からないほど曖昧に小さく手を上げただけだった。

今思うと、私はまったく言ってもいいほど怒ってはいなかったが、紗枝ちゃんはそれなりにおこっていたのではないかと、いまさらながらに思う。

紗枝ちゃんと口げんかをしてから次の日。

私は紗枝ちゃんに会い、

「おはよう」

と言う。

紗枝ちゃんは一瞬驚いたように目を大きく見開いたのを良く覚えている。

「おはよう」

その声は耳の良い私にもあまり聞こえないようなぐらいの声だったが、私には「おはよう」と聞き取れた。

生まれてはじめての友達との喧嘩はあまりにも軽い物で、始まりも終わりも分からないような喧嘩だった。

喧嘩と呼んでいいのかさえ分からない。

これが、紗枝ちゃんとの喧嘩で、最初で最後の紗枝ちゃんとの喧嘩だった。

当時、こういうことで謝る事の無かった私は、本気で謝るほどの喧嘩ではないかと思っていたのか、それを私は思い出せなかった。

第三章 出来なかった事 ?

第三章 出来なかった事

私は小学二年生の冬。十二月頃の事。

私は年間行事でその当時、一番嫌いな行事のある日だった。

それは持久走大会だった。

私は決して運動神経の良い方ではない。そして、持久力も無い。

そのため、毎年行事にあるような運動会や持久走大会が嫌いで仕方が無かった。

転校してきた学校では朝の時間と言う物が設けられており、その時間では読書をする。たまに、ボランティアの読み聞かせもあり、私はその時間が好きだった。

だが、十一月の下旬になると、その時間は運動場を走ると言う物に変わる。

それは、私にとって悪夢のような物だった。

そのため、十一月の下旬から十二月の中旬は、私にとってあまりいい年ではない。

私は当時も今も真面目な生徒だったため、やるからには精一杯頑張っただけだった。

そして、そんなある日。

私は紗枝ちゃんの走りを見て驚いた。

紗枝ちゃんは内気の割りに、運動神経はかなり良かった。

私は走り終わった紗枝ちゃんに急いで駆け寄る。

「す、すごいね。紗枝ちゃんは！」

走り終えた紗枝ちゃんの順位はなんと、一位だった。

私は後ろから数えた方が早いぐらいの位置にいる。

「えへへ。私が得意なのって運動ぐらいしかないから」

紗枝ちゃんは小さく照れ笑いをする。

「本当にすごいね。本番も頑張つてよ！」

「うん」

そして、紗枝ちゃんは本番でも二位との差をつけて一位になった。

そして、私達は小学校三年生になった。

それまでの時間はあつという間に過ぎていった。

今回の持久走大会でも、紗枝ちゃん是一位を取った。二位との差をつけて。

だが、それは紗枝ちゃんの最後の持久走大会の一位だった。

そして、三年生を無事に終え、私達は四年生となる。

四年生となったとき、ある事件は唐突に起きた。

私は小学校の事を思い出しても大まかな事しか覚えていない。それだけ、記憶も薄れ、覚えるほどの事ではなかったのか、と今では思う。

だが、私はこの事件を忘れる事は一生無いだろうと思う。

その事件は突然舞い降りる。

四年生の十一月の上旬。そろそろ持久走の練習が始まる頃である。

「ねえ、紗枝ちゃん」

「な、何」

紗枝ちゃんに声をかけたのは、吉田亜佐美ちゃんだった。

紗枝ちゃんは陸上教室に通っていて、その吉田亜佐美ちゃんも陸上教室に通っているのだと紗枝ちゃんから聞いた事がある。

「あのさあ、今度市の大会があるじゃん？」

「うん」

紗枝ちゃんは何か怯えながら頷いている。

私はその場で、紗枝ちゃんは何を怯えているのだろう、と思う。いつもは普通に話しているのだ。

紗枝ちゃんの亜佐美ちゃんにたいする態度が変わったのはつい最近である。

何があっただらう？

「それでさあ……。その市の大会か、学校の持久走大会。どっちかさあ、一番をあきらめてよ。それで、私に一番を頂戴」

はあ？

私は思わず眉をひそめる。

頼んでるにしては態度でかすぎないか！？それに、そんなことしたら八百長じゃん。

「……………」

紗枝ちゃんはそれを聞いて困ったように顔をゆがめている。

「ねえ。それじゃあさ、考えておいてよ」

私は亜佐美ちゃんに対して疑念を積もらせたが、私は何も言えなかった。

私がつつと麻美ちゃんのほうを見ているが本人は気付かない。

「ねえ。話の続き、何だっけ？」

「あ、そうそう」

私は麻美ちゃんのせいで切り上げられていた、話に戻した。

私が亜佐美ちゃんが紗枝ちゃんに八百長をしるといつているのを知ってからも、飽きることなく何度も言っただけで来た。

私は亜佐美ちゃんに何かいおうと思っただが、何もいうことが出来ずにいた。

それは、「お前に何が分かるんだ」みたいな事を言われたら何もいえないような気がしたのだ。

そして、何もいうことが出来ずにいて、そのまま何の進展も無くそれを繰り返した。そして、私は何かいわなかった事を後悔する事になる。

あれ。今日は着てないのかな？

持久走大会の一週間前。紗枝ちゃんは学校を休んだ。
私は風邪かな、と思つて、その日は仕方が無くいつもはしない読書をした。

そして、次の日も。また次の日も紗枝ちゃんは休んだ。
大丈夫かなあ……。あと少して持久走大会なのに……。
今日も着てない……。

私は紗枝ちゃんのいない空いた席を見つめた。
すると、先生がなぜか暗い顔をして入ってきた。

いつもは明るくて元気な先生なのに……、どうしたんだろう。

「今日はお知らせがあります」

先生はいつもよりワントーン低い声で話し始める。

「朝の会ではなく、一時間目の総合のときに話そうと思います。それでは朝の会を始めましょう」

少し先生は元の口調に戻し、朝の会を始めた。

私は先生が何故あんなにも深刻な顔をしているのか。心のどこかで分かっていたのかもしれないが、私にははつきりと分かっていなかった。

そして、朝の会が終わり、気に掛かりながらも私は読書を始めた。
しばらくすると、一時間目の始めのチャイムが鳴り、先生が入ってくる。

そして、挨拶をし、みんなが席に着いた。

「それでは……お話をしますね」

先生は一度そこで言葉を切り、クラス全体を見渡す。

「現在、紗枝算は学校をお休みしていますね。前までは風邪だと言っていました、本当は風では無いんです」

え？

クラスでざわめきが広がる。

だが、先生が注意するとそれはすぐに納まった。

そして、私はそれを聞いて先生の顔をより一層真剣に見る。

「今日は亜佐美さんも学校を休んでいますよね？」

私はさつと亜佐美ちゃんの席を見る。そこにはいつも元気にいる麻美ちゃんの姿は無い。

もしかして……

「知っている人もいるかもしれませんが、亜佐美さんは紗枝さんに市の大会が持久走大会の一位をあきらめてくれ、と言っていたそうです」

それが原因……？

「それで、亜佐美さんは責任を取るためにも、明日の持久走大会には出場しないそうです」

私はそれを聞いて何故か腹がたった。

紗枝ちゃんは運動神経がよくて、いつも徒競走や持久走で一番をとっていた。それがすごいと思って、紗枝ちゃんを褒めていた。

確かに亜佐美ちゃんは紗枝ちゃんがいたからいつも二番だったのかもしれない。だけど、亜佐美ちゃんがやったのはいけない事だと思う。

それで、結局紗枝ちゃんにとって償いになったのかというところでもないと思う。紗枝ちゃんなら市の大会のほうも出ないと思うから。

第一、亜佐美ちゃんは紗枝ちゃんに直接謝って無いんじゃないかと私は思う。

大丈夫かなあ、紗枝ちゃん……

第三章 出来なかった事 ? (後書き)

今回は一つの章が長いので、二つに分けます。
更新をお楽しみに。

第三章 出来なかった事 ?

「ただいま」

「お帰りなさい」

私は一時間目からずっと上の空で、いつの間にか家に帰宅してしまっていた。

母と上の空のまま適当に会話し、自分の部屋に行く。

そして、自分でも名を書いたかも分からない宿題を終え、すぐに時間は経っていった。

「おい。お姉ちゃん。ご飯だよ」

妹の声がし、はっとする。

時計を見ると六時半になっていた。

言われた通りに食卓へと向かい、ご飯を食べ始める。

「ねえ、お母さん」

「なあに？」

母は端を動かしながら聞く。

「紗枝ちゃん、風邪じゃなかったんだって」

「やっぱり」

母は予想をしていたと言うように平然と答えた。

私は母に一時間目の事を話す。

「ふうん。でも、本当にそれだけなのかな？」

「何が」

こうしているとき妹は話に入ってこないから助かる。妹は何か食べているときは大事な事が無い限り、何も話さないのだ。

「いやあ。ただの勘なんだけどね。それ以外の理由に何かあるんじゃないのかな、って。何か心当たりは無いの？」

私は考えてみて、思い当たる節が一つだけあった。だが、

「……特に無いなあ」

私はそれを母に言わない。

何か言われるような気がして怖かったのだ。自分のしていることについて何か言われるのは嫌いだ。

「ご馳走様」

母が思いついたかのように言う。

「宿題やったの？」

「うん」

適当にやった、何て事は言わない方が良さだろうと悟り、私は自分の部屋に戻った。

理由。

私はそれに対して一つ思い当たる事があった。

毎年、夏には水泳があった。

私達は四年生だ。四年生は水泳で変化が起こる年である。

小学校三年生までは、膝丈ぐらいしかない水が入っている小さなプールで水泳の授業行うのである。しかし、四年生になると、二十五メートルの大きなプールとなる。一番深いところでは百四十五センチの背が無いと立つ事は出来ない。

だが、当時の私は百四十五センチがあるかないかで、足がつくかどうか微妙なところである。

さらに、私は泳ぐ事がお世辞にも上手とは言えなかった為、おぼれてしまいそうになったことが一回だけあった。

それは私のことなので置いておくとしよう。

私と違い、紗枝ちゃんは水泳も出来る。おまけに、背も高いので足をついたとしてもおぼれる心配など皆無だ。その証拠に、紗枝ちゃんは二十五メートルのプールを楽に泳いでいた。

話は少し変わるが、水泳のプールのある場所と私達の教室は近くない。校舎一つ分は離れている。そのため、移動をしなければならぬ。

そして、その移動時間の時には紗枝ちゃんの周りには自然と人が集まっていた。私はそれを紗枝ちゃんを賞賛するためだろうと思って

いたし、それ自体は別に悪くはないと思っていた。そのため、私と紗枝ちゃんが一緒に行こうと約束をしても、一緒に行けることは少なかった。

そのうち、移動教室の時には紗枝ちゃんと距離を置こうとするようになった。

それは水泳以外のときでも続いた。

私は水泳の移動教室以降、距離があるように感じた。

その距離はいつまで経っても埋まる事は無く、逆に段々とはなれていくような気がしてならなかった。

それでも、私は休み時間に紗枝ちゃんと話したり、紗枝ちゃんと遊んだりもした。

そして、私が紗枝ちゃんとの心の距離を感じながらも話していた頃。

「でさ、妹が」

「うん」

「とか言つてさ、生意気………というか、憎たらしいんだけど」

私は意気込んで拳を握り締める。

「うん」

紗枝ちゃんは私の話を聞いていても、無表情であいまいに頷くだけ。

「で、どうなったの」

しばらく紗枝ちゃんの顔を見ていて考えていたため、話の途中で黙った私を紗枝ちゃんは少しだけ見る。

「あれ？何を話していたっけ」

「忘れたの？妹の話だよ」

「……あ、そうか。それで」

私は話しに戻り、二人で笑った。

私は笑いながら考える。

嗚呼。もしかしたら、紗枝ちゃんはこんなにもつまらない話しを聞いていたんだな。

それに、よくよく思い出すと私が一方的に話していただけのようで、紗枝ちゃんは何も話していないような気がする。私はそれを思うと自然に目を伏せていた。

嗚呼……。もしも、紗枝ちゃんが学校にこれなくなった理由に、私の思った事が入っていたら？

私はそれを思うと頭を抱えた。

「おい。優花、お風呂」

「お姉ちゃん。お風呂だつて」

私は妹の声だけが辛うじて聞こえた。

「お」

「はいよー」

妹の声を途中でさえぎり、私はダンスから着替えを取り出し、風呂場へと向かった。

風呂から出た私はぽかぽかと温まった体になっていた。

そうしたら、すぐに眠気が襲ってきた。

いつもは風呂に入ってから、逆に眠気が醒めるのだが、今日は違った。

頭が疲れていたからだろうか。

今日はもう寝よう……

私は大きな欠伸を漏らし、いつもよりも早めに寢床に着いた。

そして、持久走大会当日。

亜佐美ちゃんは学校には来なかった。

もちろん、紗枝ちゃんも来ない。

私にとつての持久走大会はつまらない物に変わった。つまらない。

それが私の感情。

持久走大会が終わり、席に着く。

私はなんとなくクラスを見渡した。

私は紗枝ちゃんもこのクラスに戻ってこないような気がした。クラスの皆は、楽しそうに何か話している。

私は他の人と関わろうとしなかった。

ああ。如何してこんな事になってしまったのだろうか

第四章 つまらない日々

第四章 つまらない日々

「そういえば、お前っていつも独りでいるのな」

「……まあね」

何気ない男子の一言。

私にはその言葉が突き刺さったが、決して相手は悪気があるわけでも無い。

「……というか、読書する時間も増えるような気がするけど？」

「最近、読書に目覚めたんだよ。というか、余計なお世話だよ。東くん」

「ふうん」

ちよつと顔を曇らせた東くんだが、その後に短い会話をする。

そのあと、東くんは自分と仲がいい男子二人、石田くと佐津間くんのところに行ってしまった。

今の私にはその三人しか友達といっても良い人がいない。

持久走大会があつてから、紗枝ちゃんはクラスに戻ってきていない。それどころか学校にすら来ていなかった。

それに対して、亜佐美ちゃんは持久走大会が終わってから、何食わぬ顔で学校に来ていた。

私はそれを思うと、そんなしたのは紗枝ちゃんだけなのではないかと考えた。

亜佐美ちゃんは経った一回だけ持久走大会に出ることができなかつただけだ。

じゃあ、紗枝ちゃんは？

紗枝ちゃんは一回だけで済むの？

あれから何ヶ月も学校に来ることさえもできていないのに、来年の持久走大会なんて参加する事ができるの？

私は出来ないと予想する。

元々、私が転校してきた頃から不登校気味だった。それがまたはじまってしまった。

それが来年までに回復する事ができるのか、そう言われると、その可能性はきわめて低いだろう。

思わずため息が出た。

私は今読書中。

もちろん、独りで。

紗枝ちゃんがいなくなってから、私は女子の友達がいなくても同然だった。

私は学校生活で紗枝ちゃんとし関わりを持っていなかった事を嫌でも思い知った。

私ははつきり言って友達を作る事は苦手な物でしかない。

おまけに、人と関わる事すら上手ではなくなった。

だから私は独り。

紗枝ちゃんがいなくなってから、私は声をかけられるわけでもなく、声をかけるわけでもなかった。

紗枝ちゃんといいた頃は話しかけてくれる人もいたのに。それは、紗枝ちゃんが目当てだったということだろうか。

そして、私に話し掛けて来てくれるのは数少ない三人の男子だけ。それでも、会話は少ない。

そして、男子と話していて思うのだ。

ああ、男子といるのはらくだなあ。何も考えなくていい。裏表が無い。

何かあったらキツパリ言ってくれる。

はつきり言っただもろっこしい女子は嫌いだ。

そして、それを言い訳にして自分から足を踏み出さない自分が恨めしい。

別に読書をしていれば休み時間はどうにかなる。

だが、時々考えるのだ。私はこのクラスに必要とされていないの

ではないか、と。

私がいなくなった所でこのクラスで困る事はさほど無いと思う。リーダー性があるわけでもなく、人気があるわけでもない。そんな自分がいなくなったとしても困る人は少数だろう。

それらを思うとどうしても気が重くなる。

私は窓のほうを見た。

私の心を表すかのように、灰色の薄暗い雲が空に漂っている。おまけに、雨まで降りそうだった。

そういえば、天気予報は雨って言ったな。

私は再び思いため息をついた。

本当につまらない。

もし、紗枝ちゃんが戻ってきてくれたとしても、このつまらない日々を変えてくれるのだろうか。

私はつまらない日々を過ごしながらもいつの間にか、五年生になってしまっていた。

紗枝ちゃんは結局、四年生の中に学校に来たのは両手で数えられるほどの回数しか来ていなかった。

学校に来たことはあっても、クラスに戻ってくる事はなかった。

そして、今に至る。

五年生の時にはクラス替えがある。そのクラス替えは結構に重要である。

五年生のクラスのまま、六年生になるのだ。そのため、五年生のクラスではいい人がそろっているといいな、とは思っていた。

だが、その願いはことごとく打ち破られる羽目になった。

四年生の終業式の日にはクラス分けの用紙がもらえるのだが、その用紙を見て頭を抱えた。

なんとなく……さえちゃんとは離れるだろうとは思ってたよ。

それはいい。なんとなくそう思っていたから。だけど……三十三人中同じクラスになったことがある人が六人しかない。

しかもあまり話さない人のほうが多いし。

あ、でも、石田くんと東くん、佐津間くんが一緒だからまだ良いか。

あまり良いメンバーとはいえなかったが、わざと明るい方に考えようとした。

そして、しばらくしてから紗枝ちゃんのクラスのほうを見ると、私の思う良い人が集まっていた。

やっぱり、紗枝ちゃんのクラスはいい人ばかりだなあ。

ため息をつかずにはいられなかった。

「はあ……」

新しく五年生になって十日が過ぎたが、私はいまだに独りでいた。五年生になり環境が悪くなったとしたか言いようが無かった。

殆んどが同じクラスになったことの無い子ばかり。同じクラスになったことがある人でも、あまり話した事の無い子ばかりだった。

こんなにもつまらない生活。いつまでこんな生活続くんだろう。

私はこういう事を考えると、どうも寂しさを思うようである。

そんな事を思うのは毎日だと言うのに、いまだに慣れていない。

ああ、本当にいつまで続くのだろう。

そして、五年生になって一ヶ月が過ぎた頃。

ようやく紗枝ちゃんが学校に来るようになった。それも、毎日学校には来れているようである。

それは、大きな進歩であった。

四年生の時には極僅かしか学校にくる事が出来ていなかったのだから。

だが、例えばクラスが変わったとしても教室に行く事はできていないようであった。

私は寂しさを紛らわせたかったのか、毎日のように紗枝ちゃんに会いに行っていた。

紗枝ちゃんがいるのは職員室の隣にある小会議室。

私は暇さえあれば紗枝ちゃんの元に行っていた。

そのときは忘れてしまっていたのだろうか。

自分が紗枝ちゃんを傷付けてしまったかもしれないと言う事を。

私はそれを思って更に思うのだ。

私はそれを忘れるほど、教室から逃げ出したかったのだろうか、と。

第五章 相談

第五章 相談

私は毎日のように紗枝ちゃんのところへ通い続けた。

そんなある日の事。

「いいなあ。紗枝ちゃんは」

「なにが？」

「だってさあ、教室に行かなくてもいいじゃん」

私は言ってから自分の愚かさ気づく。

しまった。学校に行きたくないのがバレバレじゃん。

それに、本当は紗枝ちゃんは普通に学校に通いたいのかもしれないのに！！

「もしかして教室に行きたくないの？」

「……まあね。息苦しいし」

「私は平然を保つようにしながら言う。」

「ねえ、それならさあ。もう教室に行かないでここにいればいいじゃん」

「え？」

「私みたいに教室に行かなくてもいいよ？」

……それは悪魔の囁きだった。

私は黙り込む。

確かに……ね。

そうすれば私は楽になるかもしれない。

でも、親がそんな事を許すの？

親が許すのならば、私はその囁きに乗ってしまったらどうだろう。

だが、私の親がそんな事を許すはずが無いのだ。

「……あ」

私は小会議室にある時計を見て声を漏らす。

「やっぱ。あと少して休み時間終わっちゃうよ！！じゃあねっ」
私は紗枝ちゃんに軽く手を振り、小会議室をあとにした。

私は本当に教室という場所が嫌だった。
他に一人でいる人はいない。

自分が独りでいる事が恥ずかしくて、独りでいるのが嫌でしょう
がなかった。

そうだ。私は嫌なんだよ、ここが。
社会の授業をしている先生をぼうつと見ながら私は思う。

……明日、先生にでも話してみようか。

そして、明日。

私は先生に短い手紙を渡した。

指定した場所は職員室の隣にある小会議室。

私はランドセルもそこにおいて先生を待った。

もうここには紗枝ちゃんもいる。

そして、しな楽すると先生は現れた。

「ゆうかささん、ちょっときてください」

「はい。じゃあね」

私はランドセルを持ち、紗枝ちゃんに軽く手を振った。

教室に向かうまで、先生と私は無言のままだった。

そして、教室にランドセルを置いてくるように言われ、黙ってそ
れに従う。

廊下にいる先生に手招きをされ、廊下へと向かう。

それと入れ替わって先生は教室の皆に言った。

「それでは、朝の歌を歌っててください」

クラス中に聞こえる大きな声で言った伝えた先生がすぐに戻って
きた。

先生は扉を閉める。

だが、クラスの中で合唱に対しての呼びかけは廊下にまで聞こえ

た。

「……ところで、あの手紙を読むと、貴方は学校に帰宅無いようだけれど？」

「はい……」

先生は私の学校での様子を見て理由なんて分ってるんでしよう？
「でも、貴方が学校に来なくなって、もう一度学校に来たくなつたとき、貴方はここに帰ってくる事ができるの？」

「……」

それは……たぶん無理だろう。

それで、紗枝ちゃんはクラスに戻ってくる事ができなくなっているのだから。

「紗枝ちゃんもそうだけど……このクラスにもいるでしょう？不登校の子が。あの子は、教室に戻ってきたときに注目でもされるんじゃないかと思つて怖がつて学校に来ることが出来ていないのよ」「

私は確かにそんな封にはなりたくない……。でも……。

先生は私が何を考えているのか分かつたのだろうか、

「今の優花さんには教室での居場所は無いのかもしれない。なら、不登校になるのなら、それを見つけてからにしない？」

「……はい」

先生は小さく頷き教室に入るように促した。

私は自分の席へと向かう。

皆が歌を歌っている中、私は教科書をしまつたりしていた。

私はそれで注目を浴びている事に気づかない。涙をこらえる事で精一杯だった。

先生の言つた事なんて、そんな物、頭の中では理解していた。でも、それが出来ないから私は困っているんだよ。

こらえていた涙が私の頬を流れる。私はあわてて持っていた教科書で顔を隠し、見られないように涙を拭いた。

だが、隣の席の子には見られてしまったようである。ちょっと驚いた顔をしている。

私はロッカーへと鞆をしまい。
席へと向かい何事もなかったかのようにうたい始めた。
だが、いつもより声はかすれていたのかもしれない。

そして、朝の会が終わると隣の席の子に声をかけられた。

「……お前、何かあったのか？」

やはり、泣いていたのはばれていたらしい。

「別に何も無いよ？」

少し赤くなつた目で私は言って、笑顔で首をかしげた。

今の言葉には説得力など全くなかつたかもしれないが、私の顔を
見て少し間を空けたが、

「そうか」

短くそう言った彼は、すぐにどこかへと消え去つた。

もう、いいや。何でも。

先生に助言をもらつても何もいえない私。

居場所を見つける……か。

そのためには紗枝ちゃんの元へもあまり行かない方がいいのかも
しれない。

ううん。

それはたぶん無理だ。

今の私には紗枝ちゃんにしか縋る相手がないのだから。

そして、それから何ヶ月もの時が過ぎたが、結局私は変わらな
かった。

ただ、「独り」で読書をするだけ。

「独り」という寂しさを感じながら。

第六章 運動会

第六章 運動会

私の通っている小学校では運動会は五月の中旬に行われる。

私にとっては運動会は年間行事の中で二番目に嫌いな物だった。とにかく、運動をする行事は嫌いなのだ。

そして、五年生の運動会はなんとなく始まり、いつの間にか終わってしまっていた。

そして、あつという間に時は過ぎ、今は六年生である。

五年生はつまらない日々を毎日過ごし、いつの間にか終わってしまっていた。

先生からの助言をもらってから、私は何も変わらなかった。本当につまらない。

六年生になってもつまらない日々は続いた。

そして、六年生になってから、約一ヶ月経った。

それは、運動会の練習シーズンに入った事も意味する。

六年生の定番といえば、組体操である。

私はとにかくそれが嫌だった。

高い所は嫌いだし、ピラミッドなどで下になってはとても支えきれないような気がした。

そして、その予想は見ごろに的中する事となる。

だが、その前に組み体操という定番の物を差し引いて、六年生の競技では名前は忘れてしまったが興味深い競技があった。

その競技の内容は、色々な職業を運動会にちなんでそれになりきり、走ってリレーをするといったようなものだった。

救急隊員ならば、担架で人に似せた物を置いて運んだり、主婦だったら少し重い買い物袋を持ったりするといったようあものだった。

もちろん他にも選択肢はある。

そして、私はその運動会の競技では料理人になりたかった。その内容はお玉にピンポン玉を入れて運ぶといった、地味な物だった。私は目立つためにやるわけではないので、これでいいと思っていた。それに、運動神経が悪い私にぴったりだったのだ。

さらに、私は四組だったのだが、他のクラスの話の話を聞いていると料理人はきわめて人気が無いらしいと聞いてこの競技に出ようと思っただのだ。

だが、他のクラスとは違ったらしい。

私はその料理人に立候補したのだが、私のほかにもう二人いた。一人は特別学級の女の子で、もう一人が少し障害を持っているが特別教室に行くほどでは無い子だった。

私はこの二人なら、私が料理人になれると思っていたが、考えが甘かった。

私はその二人よりはるかに上手に出来ていた。

だが、五年生から掛け持ちで同じ担任の先生は私を料理人からはずさせようとした。

違うのもやってみたら、と勧めて、私に料理人の練習をさせないようしてきた。

だが、それはそう長くも続かず、先生に廊下と呼ばれた。

「優花さん。貴方は料理人を辞めて、夫婦になつてくれないかしら？」

「え？」

私は小さく首をかしげる。

「夫婦は二人組みで縄跳びをして言って進んでいく物なのだけど、一人足りないのよ。だから、お願いしてもいいかしら」

「……………」

そついわれても何を言わない私を見て先生は困った顔をしてから言った。

「……それとね、もう一つあるのだけど、特別学級の子も、もうひとりの豊田君も、料理人ぐらいしか出来ないのよ……。だから……。貴方は夫婦の方に変わってもらってもいいかしら？」

「……はい……」

私は顔を伏せる。

先生は申し訳なさそうな声で最後に、

「じゃあ、松村さんと一緒にペアを組んでね。……じゃあ、教室に戻ってもいいわよ」

「はい……」

私は小さい声で曖昧に返事をし、教室の中へと入って行った。

ああ……。選択する物を間違えていたかもしれないな。

寢床に入った直後、私はその事を思った。

しかも、変わった物が夫婦なんて……

確か夫婦って、エプロンを着て、縄跳びを飛びながら五十メートル走るやつだろ？

運動神経も悪いし、協調性の無い私がそんな物をやらないといけないなんて。

恥をかくだけだし、私と組むペアの松村さんが可愛そうだ。

その前に、如何して私が料理人をやめなければいけないんだ？

……分ってるよ、理屈では。

私のほうが上手に出来るけれど、あの二人は料理人のようなものしか出来ないから、譲ってやってくれ、といっているんだろ？

でも……。それで私が納得するとも思っているのか？

私が……。私がどれだけ料理人をやりたいと思っていたと思うのだ。恥をかくことも泣く、皆に迷惑をかけるわけでもない。地味で目立つ事もなくて、私にあっていたというのに……。

私はそれを思うと、急に視界がぼやけ始め、なるべく音を殺して静かに泣いた。

隣には寝ている妹がいるし、隣の部屋には両親がいるのだ。

こんな事で泣いているなんて気付かれたくもなかった。

「じゃあ、松村さんと練習をしてね」

「はい……」

松村さんは若干困った顔をしている。

私と松村さんは、私にとっては無理やりペアを組まれたのだ。

私は全く納得がいつていない。

……確か松村さんは、私にあったグループの一人だったような気がする。確か、大人しめのグループだったはずだ。

それにしても、そんなにも私とペアを組むのが嫌なのか？何をそんなに困った顔をしているんだ。

それとも、ただしゃべった事の無い地味な私とどのような会話をしているのか分かっていないだけか？

どちらにしる、私がとてつもなく機嫌が悪い事を知っていてくれないと困る。

「じゃ、じゃあ、練習しようか」

何か怯えたように言い、私は練習を始めた。

初めて見ると早いものである。

案外、すぐに授業の終わりのチャイムはなった。

私と松村さんはかなり速く縄跳びで走れるようになった。

独自の跳び方しかできない私にあわせてくれているため、うまく言ったのである。

「意外と出来たね、松村さん」

「……ねえ。松村さんじゃなくて、いつちゃん、って呼んでくれな
い？」

「いつちゃん？」

私は小さく首をかしげる。

「うん。伊織だから、いつちゃん」

「……わかった。いいよ」

私は無表情でそう言う。

「いっちゃん、早く行くよー」

いっちゃんは仲良しのグループの子に呼ばれて、

「はーい。じゃあね」

そう言って私に手を振り、すぐに走り去ってしまった。

「あっ……」

私はいっちゃんを引き止めるかのように、いっちゃんに向けて手を向けたが、虚しく空を切った。

虫が良すぎる……か。

今日、初めて喋ったのに。いきなり、いっちゃんいるグループに入れてくれなんて。

私は運動場のど真ん中で足を止める。

そして、俯いた。

……如何すれば……、いいのかなあ。

私は俯いたまま、独りでとぼとぼと教室に向かった。

そして、結局の所私は夫婦をやる事になってしまった。

だが、この運動会のおかげで、私はいっちゃんたちのグループに入るきっかけにする事ができた。

もう一つ、今年の運動会でいやな事がある。

それは組体操だった。

私は小柄で、上のほうに乗るのが向いている人である。

だが、私は残念のことに高い所が苦手である。

そこで、だ。

組体操といえは、二人組みでやるやつもある。

そのため、私はクラスの中あぶれてしまうのだ。

だが、この運動会のおかげでグループに入る事ができたため、その心配は無い。

だが、私のいた小学校では肩車とサボテンという二人技があった。その二人技をするのは、私が二年生のときに転校してきてからずっと一緒のクラスだった小泉さんのペアだった。

小泉さんは、とても大人しくはたから見ればとても大人っぽく見える。私は殆んどさえちゃんとしたため、小泉さんとは殆んど話した事がなかった。

そのため、迷惑をかけるような気がしてならなかったのだ。

そして、私はいきなり迷惑をかける事となる。

「こら、優花さん。そんなにもへっぴり腰にならないの」

「ふえ」

私はなんとも情け無い声を出す。

私と小泉さんは肩車の練習をしている途中だった。

私は小泉さんの肩の上に乗る、へっぴり腰の状態になっている真っ最中だった。

「ちよつと、とりあえず下してあげなさい」

小泉さんはかがんで、私を下に下す。

「……………。ごめんなさい。小泉さん」

「いいっていいって」

小泉さんは私に声をかける前までは少し不機嫌そうな顔をしていたが、私に声を掛けられると笑顔になってそういう。

「やっぱり…………、迷惑かけてるよね。」

私は何気に肩を落とす。

「そんなにも落ちこまなくても大丈夫だって。私ちゃんと支えてあげるから安心して」

「それじゃあ、もう一回」

先生がそう言うって私は小泉さんの肩に乗る。

「あ、そうそう。そんな感じ」

私は小泉さんに言われた後は、何故か楽になった。

そのため、足の震えはまったく止まっていなかったが、何とかへっぴり腰にはならないですんだ。

そして、なんとか一時間の練習中に肩車を出来るようになった。

「ありがとう、小泉さん」

「…………ねえ、小泉さんじゃなくていいよ。下の名前は杏子だから、

なるべく下の名前で呼んで」

「うん……じゃあ、京子ちゃんは？」

「うん。『ちゃん』はなくてもいいんだけど……。うん、それでいいよ」

「わかった。今度からそう呼ぶね」

「はい」

私と京子ちゃんは無言で歩き、しばらくするとグループの子達がやってきて、再び会話が生まれる。

……こういう会話をしたのも、本当に久しぶりだな。

これからは、この子達といればいいんだ。

これで……これで、「独り」から逃れる事ができる。

私は心中で本当に喜んでいた。

孤独から抜け出す事ができるのを。

そして、「独り」から抜け出す事ができた私は、運動会を成功させる事ができた。

組体操も、何の事故もなく怪我も無く、技を成功させることもできた。

結局、イヤイヤやり始めた夫婦でも、最終的にはうまく出来た。

それに、この運動会で夫婦に私になっっていなかったら、「独り」という呪縛から抜け出す事は出来なかったと思った。

第七章 友達

第七章 友達

「……ねえ。私達、小泉さんと藤崎さんに避けられてるよね」
「そう……だ…ね」

私は自分のことだというのに曖昧に返事をする。

私はいつちゃんと一緒に家路に着こうとしている所だった。

私はそう話をしていたとき、なんと答えればいいのか分らなかった。

私はそんな風に話を始めたことは無い。

免疫が無かった方だろうか、曖昧な返事をしてしまったのだろう。

しばらく私たちは無言で歩く。

私はその間に考えていた。

私はいつちゃんと一緒にいる事さえ出来れば、別にそれでもいいとさえ思っていた。だが、いつちゃんは違った事がよくわかった。

そう思う事も、これで何度目かになる。

私は自分でも思うのだ。

私という何が楽しいのだろう、と。

私は正直を言つと、いつちゃんと同じグループにいて、何が楽しいのだろう、と。

私は時代遅れだし、テレビや雑誌なんかも見えていない。そのため、私は話題に入る事は困難である。

私が今日があるのは小説や漫画といった話が描かれている物だけ。それなのに、私のいるグループには読書好きが独りもいない。それどころか、クラスにもいないぐらいだ。

そのため、自分から話題をふるのもできないのである。

その事に気づいていたが、私は話題を取り入れるために知識を取り入れようとすることは無かった。

もしかしたら、そこらへんの会話でもいいのかもしれない。だが、私は紗枝ちゃんのことを会って以来、妙に意識して何も話せなくなってしまうていたのかもしれない。

それが一番の大きな原因だと私は思った。

私は話題が触れない事から、私はグループに入っていないながらも何故か浮いていた。

そんな事を考えていると、

「……優花…ちゃん？」

私は会話も無いまま、進んであり、そんな事を考えてしまっていたため、いつの間にかいつちゃんと分かれるところまでできてしまっていた。

おまけに、曲がる所の先まで規定し待っていた。

「あ……、じゃあね!!」

私はいつちゃんに手を振ったが、いつちゃんはそれに対して何も返してくれなかった。

そして、今回の件を通して私は思ったのだ。

私はいつちゃんに迷惑をかけていたんだな……、と。

エピソード 1 車内で

エピソード 1 車内で

私は今車の中にいる。

運転は父がしている。助手席に母。そして、後部座席の運転手側には私の妹、助手席側には私が乗っている。

「車がいつもより重い!!」

乳が車に乗り始めて何度か言ったせりふをもう一度言っただけだ。

後部座席の後ろにある荷物入れには沢山の物が乗っていた。車が重くても無理は無いだろう。

今は高速道路を走っている。そのため、車の走る速度は百キロほど出ている。

どうしてこんな状態になっているのかというと、私達家族は引越しをする事になったのだ。

そして、車でその場へと向かっている最中である。

引越し先は祖父母の家だった。

私が引越しをする事は、六年生の始めごろから決まっていた。

高校に行ってから高校を変えようとする、その高校からもう一ランクしたの高校に行かなければならないためである。それに、引越しをするのも面倒だろうと、祖父母の家に住んでその場に留まるうとしたわけである。

「……本当にこれで良かったのかなあ」

父は心配そうな声を出しながら、また何度目かのこの台詞を言う。

「さあ？」

母は父の問いに対し、少し間をおいてから答える。

私と妹は父の問いに対し、何も答えない。

私は高速道路から見える景色を見ていた。

のか、と。

私は思い出を思い出してみるのが、何一つ良い思い出は思出す事が出来なかった。

私が思い出せるものには良い思い出でなんて皆無だった。

私が辛うじて思い出せたのは、「独り」という寂しさを感じながら過ごしてきた学校生活のみだった。

他にも、良い思い出といえば宿泊研修なのだろうが、全く思い出せなかった。その当時は良い思い出になると思っていたと思うのだが、今となっては全く思い出せなかった。

それほどに、「独り」という寂しさの思い出のほうが勝っていたのだろう。

私は大きな欠伸を漏らす。

私は引越し先のことについて考えた。

私には不安は無かった。

とはいえ、安心も無い。

何もかもが無関心だった。

私は「独り」を乗り越える事ができたのだから、何があっても大丈夫なような気がしていたのだと、私は思う。

そして、諦めを持っていたのかも知れない。

私は無邪気に友達と話し、笑い、楽しむことが出来たあの頃には戻れないということを知りはじめたときから。

エピソード 1 車内で（後書き）

これにて第一章 小学校時代 は完結となります。

第二章も更新していく予定です。

早い区切りではありますが、暗いだけといっても過言ではないお話は第二章で終わる事となります。

それでは、更新をお楽しみください。

第九章 新しい地

第九章 新しい地

私は引越しをした。

そして、今は祖父母の家をリフォームした家に住んでいる。

私はこの春から中学一年生になった。

中学校の説明を一切受けなまま、私は入学式を終えた。

そして、私は一年一組である事が分かった。

転校してきたこの学校では、驚くべき事に二クラスしかない。

今まで、四クラスだったので驚いた。

私はそんな事を思いながらも、一年一組の教室へと向かう。

私は担任の先生の細かい説明を真面目に聞き、休み時間を迎える。

中学校の皆は、小学校の人がそのまま上がってきたので顔は皆知

っているらしく、話弾んでいる。

私はその輪の中に入り込めずにいた。

転校生がきたのは私だけらしく、私はクラスの中でそれなりに浮

いていた。

そして、私は読書をするための本を持ってきていなかったため、

仕方が無く肯定のほうを見た。

校庭は小さく、その前には国旗もある。

その南にはさくらが五本ほど立ち並んでおり、美しく咲き誇っていた。

私はそんな事を考えながらも、ため息をついた。

また……、私は「独り」か。

私は、校庭の方を向いて顔を伏せる。そうしていた時、

「……あの、貴方って、転校生だよな？」

「あ、うん」

不意を疲れて、私は返事に戸惑った。
振り返ると二人の女子がいた。

独りは背の高い小太りのショートカットの子。もう一人は癖毛で背丈は高くも泣く低くも無い子だった。

「名前、なんていうの？」

「西垣……優花だけど……」

我ながらぱつとしない返事である。

「そうなんだ！私の名前は毛利紗智子」

背の高い方の女の子は元気よくそういった。それに続いて、

「……私は柵橋晴菜。宜しくね」

もう一人の子は不安そうに微笑みながらそういった。

「じゃあ、宜しくね」

私も自然と顔が綻んだ。

今日は決して良い振出とはいえなかったかもしれないが、私には十分な事だった。

そして、私は紗智子ちゃんと晴菜ちゃんですみ時間を過ごしていた。そして、私が転校してきてから数週間が経った頃、

「ねえ、皆さあ、『さっちゃん』って呼んでるから今度からそう呼んでよ」

「あ……なら、私も『晴ちゃん』って読んでよ」

「ん……、ならそう呼ぶよ」

「「うん」」

二人は同時にそう言って顔を見合わせた。

そして、私は小さく笑い、二人もつられて笑った。

第十章 晴ちゃん

第十章 晴ちゃん

私は学校生活の殆んどさっちゃんと晴ちゃんで時間を過ごしていた。

だが、それはすぐに崩れる事になる。

それは、私が中学生になってから二ヶ月が過ぎたときだった。

「ねえ、晴ちゃん、てうざくない？」

「えっ？」

私は小さく首をかしげる。

私とさっちゃんは家路に着こうとしていたときだった。

晴ちゃんとは地区が違うため、晴ちゃんはここにはいない。

「いや……だつてさあ。なんかうじうじしてるし、それにいつも『如何しよう』とか言ってるじゃん？」

「まあ……確かに、ね」

「でしょ？それで」

私はさっちゃんの言った事について考えてみた。

確かにさっちゃんの言っている事は間違つてはいない。

だが、私はそんな事を思った事はなかった。

私はこの人はこういう性格をしているから、こういう風に接すればいいなど考えている。そのため、性格について悪い所があつても、その性格について何も思わなかった。

よくよく考えると、それはその人に対して適当に、ただ付き合っていたからではないかと今になっては思った。

そのためなのだろうか。

私は人と接していて、小さい事なら喜んだり、怒りがわいてきたりもしない。

それは、もしかしたら、いつの間にか感情の一部がすっぽりと抜

けてしまっていたのかもしれない。

だが、それがいつ抜けてしまったのか、分かってもない。そんな事を考えていると、いつの間にかさっちゃんとは別れていた。その間には、さっちゃんが晴ちゃんに対する愚痴を言っていた事だけは覚えている。

そして、もう一つ覚えている事があり、別れ際さっちゃんが言ったのだ。

「それでさあ、どっちかというと、私は晴ちゃんと関わりたくないんだよね。だから、私晴ちゃんに明日言おうと思っただ」

「何を？」

「『もう、貴方と関わりたくないから、もう関わらない!!』て私は少しだけ目を瞬く。

「そんなにはつきり言っただ」

「皆、そんなもんだよ」

さっちゃんはさも当たり前のように言う。

「そんじゃ、明日ね」

さっちゃんは、私に向かって大きく手を振り、横断歩道を渡っていった。私はさっちゃんに向かって小さく手を振った。

そして、翌日。

さっちゃんは私に予告していた通り、晴ちゃんに昨日言っていた事をそのまんま言った。

すると、

「うん……、そうなんだ」

「だから、これから私たちとも関わらないでくれる？」

「う……ん」

晴ちゃんは私たちのほうを見ずに、顔を伏せながら言った。

それで数秒経ち納得したのか、さっちゃんは、

「行く」

私の腕を軽く引っ張って、教室の中へと導く。

私は教室に入る直前、廊下にいる晴ちゃんのほづを見た。晴ちゃんは顔を伏せ、両手を静かに握り締めていた。

ああ、私はさっちゃんに従っていたただけだった。

さっちゃんが愚痴を言っているとき、何か言ってやればこんな事にはならなかったのだろうか。

私は教室の入り口でそんな事を思った。

「優花ちゃん？」

さっちゃんが教室の中で首をかしげている。

「ああ、ごめん。なんでもないよ」

わたしはそう言って教室に入ってしまった。

私達はその後、結局晴ちゃんとすごす事は無かった。

私は晴ちゃんが嫌いではなかった。

そのためか、別れを告げてからも、晴ちゃんを目で追い、何をしているのか、と様子を見ることもあった。

だが、それも一ヶ月ほど過ぎた頃に早めてしまっていた。

そして、私は思うのだった。

私は自分さえ良ければ、他は何でも良い人なんだな、と。

第十二章 クラス替え

第十二章 クラス替え

私はさっちゃんとのグループと適当に付き合い、変わらない日々が続いていた。ついには、そのまま中学二年生になってしまった。

クラス替えが会った日。

「うっわ、最悪」

さっちゃんが割と大きな声で言う。

私は自分がどのクラスか見ながら言う。 たったの二クラスしかないのだが。

「だって……担任が」

私はさっちゃんの指差したクラスを見る。すると、そこには構内ではあまり評判の良くない先生が担任になっていた。

「あ……残念だったね」

私はやっと自分のクラスがどこだか分かった私は、誰と同じクラスかを探す。

うると、さっちゃんと奥村さんは同じクラスでない事がわかった。うわ……さっちゃんと奥村さんがはなれちゃうのは痛いなあ……。そして、中村さんと西郷さんが同じクラスになっていた。

どうせなら、さっちゃんと奥村さんは一緒のクラスが良かったなあ……。

まあ、何とかなる……かな？

私は先の事を考え、なるべく良い方向に考えようとした。

第十三章 体育大会

第十三章 体育大会

中学二年生となり、かなりのときが過ぎていった頃。

私はそれまでは何の心配も無く、さっちゃんのグループにいる事が出来ていた。

そして、一番初めの大きな行事である体育大会が九月にはあるのだ。

その体育大会により、私に代わらない日々は、変わる事になるのだが、そのときの私はまだそんな事を知る由も無かった。

「ねえ。貴女、自分が間違えている事に気づかないの？」

「はい……」

私は三年生の先輩に怒鳴られていた。

「じゃあ、やり方がわからないの!？」

「いいえ……、わかつてます」

「それじゃあ、ちゃんとやっつてよ!!」

そう言っつて、先輩は自分の持ち場に戻っていく。

私は体育大会の応援合戦の最中である。

そして、私は間違いを多くしていて、怒られたばかりである。

体育大会まで残り一日しかないので、先輩も切羽詰っているのだらう。

そんな中、ふりを間違える私は、ただ足を引っ張っているだけだった。

そして、私は結局その場で応援合戦を成功させることができなかつた。

そして、体育大会当日。

私はその後、先輩にできなかった事を謝りに言ったが「そんな風にヘラヘラ綿割れて言われても、心がこもっていない」といわれてにらまれて終わってしまった。

そのときは場所も悪かった。

あんなにも人がいる前で言うのが間違いだった。

私を見下すような目で見て、心無い噂を流されるのも嫌だった。

実際にそうだったからだ。

私を見る男子は、半分からかい半分本気で「お前、先輩に謝ってこいよ」と言ったのだから。それが、本気で言っていたならば、私はもう少しましに謝れたと思う。

私も分かっていたんだ。

笑ったりするなんて言う事は、悪い事だと。

それでも、笑ってしまったのは私が弱かったからだ。

私は同じような過ちを繰り返そうとしている。

そして、私は思うのだった。

なんとしてでも、応援合戦を成功させないと、と。

その願いは半分成功し、半分失敗する事になる。

いよいよ、応援合戦が始まった。

あ、間違えた!!!

私が間違えやすいところで真っ先に間違える事となる。

隣の女子が小声で、

「もう、何やってんの!!!」

と言った。

私だって、間違えたくて間違えているわけじゃないさ。

また、何か言われるだろうな……

私は憂鬱な気分になった。

その後、私は思っていたとおりに、周りの人に色々と言われる羽目になる。

中には「応援合戦の二回目こそ頑張る!！」と言ってくれた子もいたが、内心では如何思っているのだろうと思う。

そして、二回目。

今度こそは、何も間違えないようにする事ができた。すると一回目でいった子が、また小声で、

「良かったじゃん!！」

と言ってくれた。

私は小さく頷いた。

私は成功をさせる事が出来て心のそこから安堵した。

これで、何も言われなくて済むと。

そして、体育大会は幕を閉じた。

結果は応援合戦は私のいる赤組係、総合でも赤組が勝つ事になった。

私は再び安堵する。

これで赤組が負けていたら、また何か言われるからよかったと思っただった。

そして、まだこの時の私は知らなかった。

この体育大会が、変わらない、またつまらない日々を帰ることになる事を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1810z/>

少女時代

2011年12月29日14時51分発行